

ローカルスタイル—③広島

「山は面白い」。 子どもたちと登るプロ集団。 広島登山研究所



写真と文・松島 宏

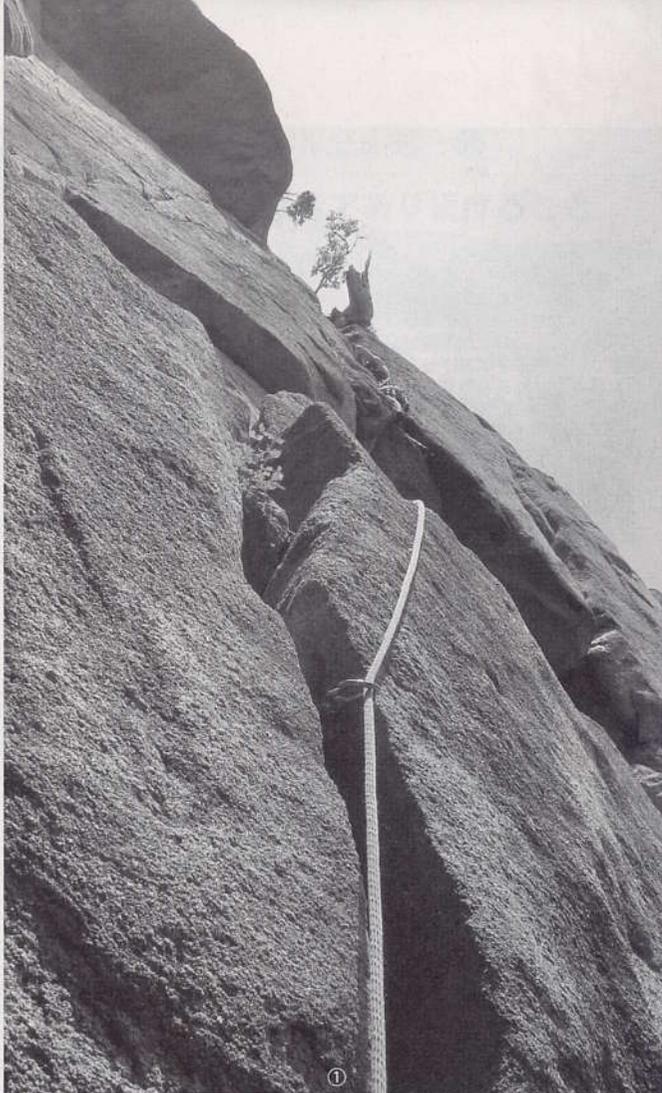
①岩登りのゲレンデ、大竹市三倉岳青白ハング。
②③奥三段峽の沢登りを楽しむジュニアアルパインクラブ中学生7人。広島には岩登りや沢登りのゲレンデが豊富だ。広島は夏は暑いので、夏場は小中学生も大人と同じように沢に入り、滝を登ったりして挑戦的な遊びを楽しむ。こんな環境が広島の子ヤを育てている。

●アマチュアからプロ集団へ

「広島山の登山家」というとどんなイメージがあるだろうか？

あるとしたら古い話では、黒部奥鐘山西壁広島ルートや唐沢岳幕岩の広島ルート、S字状ルートなどに代表される優秀で屈強なクライマーたちが広島には大勢いた。彼らの何人かは山で死に、生き残った人たちはも現在、高齢化の波にさらされている。広島山の会代表を長年務めた平田恒雄氏も御年76歳で未だ現役登山家。5月には一緒にネパールで5千メートルのトレッキングを楽しんだ。5千メートルの高所でもかくしゃくとして食欲も衰えず、酒も飲める。大変元気で登高意欲も衰えはない。恐るべき最強の老兵、尊敬すべき大先輩だ。彼らが最強の広島岳人の伝説を作ってきた。

現在の広島県のアльパインクライミングは古き鉄の時代の残党ともいえるべき人物が牽引している。1981年インドヒマラヤ、クン峰西壁初登の広



島山岳会の名越實。1992年中国四川省四姑娘山(6250m)南壁初登の広島山の会の吉村千春。それに大学山岳部出身の松島宏(広島大学)。佐藤建(広島修道大学)。この4名は50代と60代の現役クライマーで広島市の海外遠征の仲間である。ここ数十年単独の山岳会では遠征できないので、ずっと組んで登っている。

さて、4人は昨年登山ガイドの資格を取得した。この元気な中年アルピニスト4人に、小学生と中学生の登山部を主宰する若手の今村みずほ、広島大学の留学生で韓国大邱市出身の若手登山家の李尚起(イサンギ)の合計6人で広島登山研究所(以下、広登研)を立ち上げた。広島でのプロとして楽しい登山の研究を実践し、登山をすべての年齢層に推奨することが目的である。広島登山研究所はアマチュアの山岳連盟から発生したプロ集団である。ちなみにクライミング好きの佐藤建はこの春、西日本最大級のクライミングジムを広島市内に開設した。

●強い山ヤを生む アルパインの土壌

山のスケールはたいしたことはないが、広島には昔からアルパインの土壌がある。その広島のゲレンデをご紹介します。

広島山の山ヤの原点は低山、藪山だ。広島県の最高峰は1346mの恐羅漢山。ブナやミズナラの原生林があり、冬は2m近い雪に覆われる。南はしまなみで有名な広島だが、県北は雪国さながらなのだ。そんなわけで、実は広島にはスキー場もたくさんある。県外からの客も多い。

広島は夏は暑く、沢登りが盛んだ。廿日市市吉和の細見谷や安芸太田町や北広島町の三段峡の支流の二谷、奥三段峡。山口県の寂地山の沢もスケールが大きく素晴らしい。鳥取県の大山にも甲川という素晴らしい沢がある。この沢での滝の登攀や高度なへつりがわれわれを育てたとも言える。岩登りのゲレンデも都市近郊にあり呉市天応の

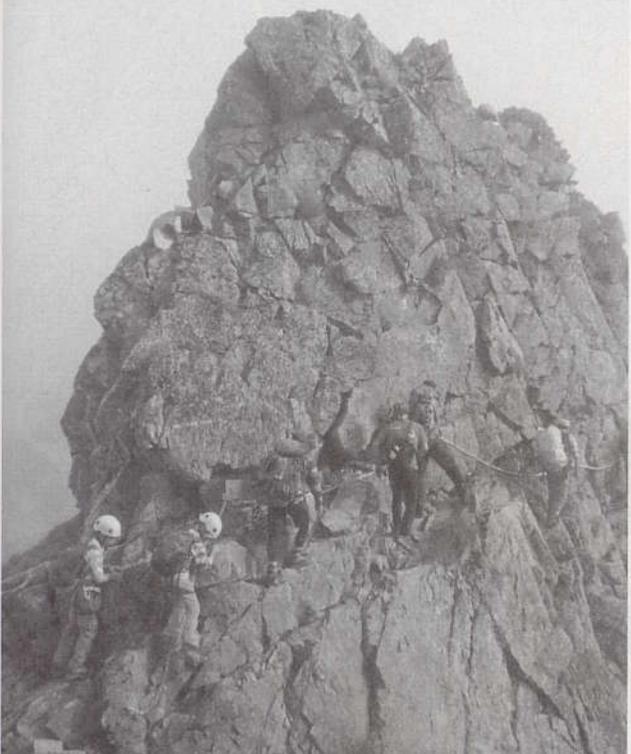
烏帽子岩山の黒ナメラ、大竹市の三倉岳がクライマーのメッカとなっている。最近では下帝釈の岩場に通うクライマーも多い。前述したが、冬のゲレンデにも事欠かない。山スキーやラッセルは県内の山でも十分できる。広島は一年中通して結構素晴らしいゲレンデをもっているのだ。広島山の山ヤが強くなったのは、これらの環境のお蔭であろうと思っている。

中でも鳥取県の大山の存在は大きい。ゲレンデというには余りに危なすぎる山である。多くの山ヤが命を落としていく。98年我が日本を代表するアルピニストの高見和成氏も天狗沢の氷壁から墜落して亡くなった。大山は日本海に面した独立峰で風が強く、湿った雪が大量に降り全山雪崩の危険性が高い。夏はポロポロの北壁が凍り、素晴らしいミックス壁となる。支点はなかなか取りづらく、究極のアルパインクライミングを追求できる。大山の北壁をこなせれば世界中の山に挑戦できるといった感覚をわれわれは持っている。それ

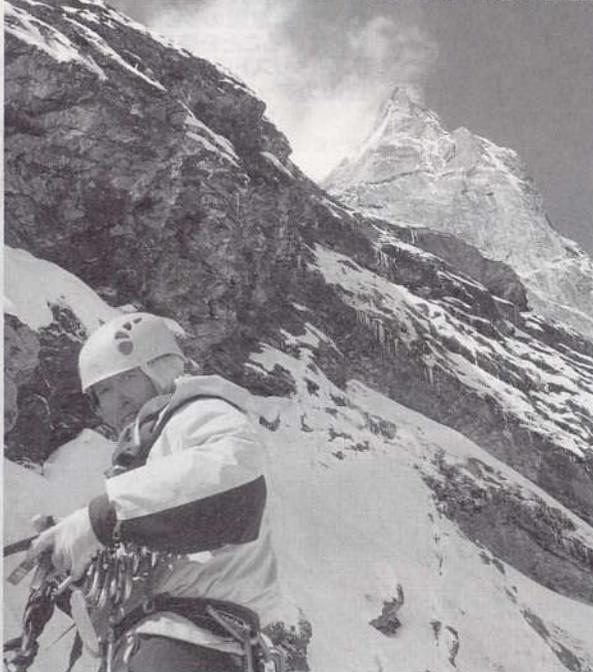
PROFILE
まつしま・ひろし
1952年生まれ。広島大学時代、6月の細見谷で登山の楽しさにはまる。岩登り、雪山、アルパインクライミングに没頭。ネパール、中国、ベルギー、アンデス、天山など海外遠征も多い。高校教師、広島岳連事務局局長をへて2010年、広島登山研究所設立。同所長。日本山岳ガイド協会認定ガイド。

●「好きと楽しい」 子どもたちへのサポート

さて、若い人の経済基盤が厳しい状況の中で、昔のように若手クライマーが世界に羽ばたくことが地方では難しい。われわれは40年現役で登っているが、後継者をなかなか育てていけない。山岳連盟加盟の山岳会も高齢化で衰退気味である。そこで、広登研の重要課題のひとつが、子どもの登山の支援である。われわれの世代は子どもの頃



今夏の立山・剱遠征には小中学生8人が参加した。雷鳥沢から5人が9時間半で剱岳を往復し、大日岳に向かった3人は8時間半で帰ってきた。彼らの実力はすごい。



ローカル登山術①

勇氣ある挑戦者であり続けること

地元にも素晴らしいゲレンデがある。地方から自信を持って羽ばたき、世界に挑戦する。それがわれわれの変わらない姿勢だ。

世界への挑戦もトレーニングも地元でできる。そのためには、山行のすべてを自力で貫徹する。自分の力を信じる。本番の挑戦をイメージし、厳しいトレーニングを実践する。すべて自己責任だ。

地元でのた打ち回って鍛えた自分を信じて挑戦する。年齢なんか気にしない。登りたい、挑戦したいという気持ちがある限り、やり続ける。子どもの頃単純に登りたいと思った気持ちは変わっていない。

いつまでも勇氣ある挑戦者でいたい。こんなことを子どもたちに伝えたい。子どもたちと一緒に、元気に登る。そして地方から世界へ、羽ばたき続けたいと思っている。

広登研のメンバーが組織した海外遠征は以下の通り。

2010年春●中国四川省・夏麦拉峰5470m(シャーチャンラ峰)初登頂(JAC隊)。

2007年秋●中国四川省・霸王山5551m(バーワンシャン)初登頂(JAC隊)。

2005年春●ネパール・テンカンポチェ峰6500m(北東岩稜試登(私隊))。

1998年夏●天山・ハンテングリ、ホベータ峰(岳連隊)。

同年夏●カナダ・バフィン島フリーガ壁(岳連隊)(いずれの報告書も広島登山研究所のホームページに掲載中)



2007年秋、初登頂した中国四川省の霸王山。登頂は日没後で厳しく危険なビバークを強いられた。

DATA

わんぱく登山部の実践と成果

国立登山研修所 登山研修 VOL26-2011 2011/3/31発行

広島登山研究所 <http://www.ccv.ne.jp/home/hirotoken/>

わんぱく登山部 <http://wanpakutozanbu.web.fc2.com/>

2007年、「わんぱく登山部」は子どもの自然体験活動企画の全国コンテスト「第6回トムゾーヤスクール企画コンテスト」で大賞の「安藤百福賞」を受賞した。

から自然に恵まれ、遊びで山に登り成長した。「リスクを背負って自然の中で遊ぶ」ことがいかに大切で人間形成にとっても重要な教育環境であるかということに最近になって痛感している。

だが、今の子どもたちは、それを叶えるには難しい環境にあるだろう。塾通いや習い事、特に男子はゲームなしでは遊びが成り立たないのだという。子どもの本来あるべき姿の「自然のなかでしっかり遊ぶ」ことが全然できていない。困ったことである。

2007年から高校登山部出身の今村みずほが小学生を対象とした「わんぱく登山部」を創立した。それは、子どもに山登りを教えるスクールや登山学校ではない。目的は自然の中で自由に遊ばせること。「好きと楽しい」の実践である。通年制のクラブで毎月1回日帰り登山。夏のキャンプは2泊3日で沢登りやロングランを入れる。今年は大山で実施。雪遊びや雪山も登る。われわれ大人がやっている山登りをそのまま提供する。

スタッフはわれわれ現役アルパインクライマーや若手のスタッフ。安全管理に努めてはいるが、子どもたちは自由に登り、遊び尽くす。基本はすべて自由である。例えば腹が減れば、ご飯を食べても構わない。自分で考えて行動し、リスクは自分で背負う。自然が学校となり仲間や自然が教師となる。親の管理下から解放されて1日自然の中で遊べるって、子どもにも魅力的らしい。

さらに、わんぱく登山部を卒業し、中学生になっても山に登りたい彼らは、ジュニアアルパインクラブを発生させた。読図力を磨き、中学生だけで山に入れるように頑張っている。

子どもたちは成長し、驚くことに彼らはアルピニストの感性を持ち始める。悪天候のため上高地から奥穂や西穂の登頂を断念した時、心底悔しかった。強風下の大山で身体を飛ばされそうになっても挑戦を選んだ。純粹に登りたいという気持ちは私たちが以上に強い。逆に教えられることが多い。すでに広島の元気な山やである。

彼らのこれからの活躍が楽しみである。これからもずっと彼らと一緒に登り続けたい。そして、いつまでも広島の元気な山やでいて欲しいと望んでいる。